

DIABLO
IV
BELIAL'S RETURN

嘘をつく者 すべて



短編小説 作
MATTHEW J. KIRBY

ストーリー

MATTHEW J. KIRBY

イラスト

ALEX MALEEV

編集

CHLOE FRABONI

デザイン&アートディレクション

COREY PETERSCHMIDT

ロア・コンサルテーション

IAN LANDA-BEAVERS

クリエイティブ・コンサルテーション

MATT BURNS, NICK CHILAN⁺,

DAVID LOMELI, RON MARZ

プロダクション

BRIANNE MESSINA, CARLOS GARCIA RENTA,

TAKAYUKI SHIMB⁺, VALERIE STONE

スペシャルサンクス

ROD FERGUSSON, MELISSA SMITH, RAFAEL TELL⁺

翻訳

SHING⁺ END⁺, RYOSUKE OKUYAMA



BLIZZARD.COM

© 2025 Blizzard Entertainment, Inc. BlizzardとBlizzard Entertainmentのロゴは、米国またはその他の国における

Blizzard Entertainment, Inc.の商標または登録商標です。

Published by Blizzard Entertainment.

この物語はフィクションです。名前、登場人物、場所、出来事は作者またはアーティストの想像の産物であるか、架空の存在として使われており、生死を問わず実在する人物、事業体、出来事、場所に類似するものがあったとしても、それはまったくの偶然です。

Blizzard Entertainmentは作者または第三者のウェブサイトおよびそのコンテンツについて一切管理を行わず、それらに対する一切の責任も負いません。

嘘をつく者すべて

父親が手押し車を使って死体を運んだのは、これが初めてではなかった。前回、羊頭の獣が高地から叫び声を上げて降りてきたときには、惨殺された隣人たちの遺骸を荷台からはみ出すほどに載せて運ぶ羽目になった。それから、教区民として熱心に祈りを捧げたにもかかわらず、熱病と腫瘍が蔓延した村から遺体を運び出すのにも使った。世が世なら、このちっぽけな木製の手押し車は愚直な農作業で、石や屎尿をまとめて運ぶためだけに使われていたはずだ。だが、父親はそのような寛大な世界には生きていない。彼とその妻は、破碎山脈の過酷な土地で辛うじて生を繋いでいる有様だった。そして今、疫病と暴力に倒れた者たちの痕跡が染みついた手押し車に載せられているのは、小さくてか細い彼の娘の遺体だった。

夫婦は自分たちの目的を恥じて日中には移動せず、冷たく、微かな月明りの下で廃墟に到達した。崩れた礼拝堂のギザギザに尖り、焦げた柱や梁が上に突き出していた。かつては扉が存在したアーチ状の入り口は、隙っ歯の口が声なく叫んだまま凍り付いたかのように、ふたりの前に開け放たれていた。父親と母親は入り口で立ち止ったが、それはためらっているからではなかった。理由は違えど、ふたりはすでに同じ選択をしていた。単に、次の一步を踏み出すのが怖かったのだ。

廃墟の影から頭巾をかぶった人物が現れ、微かな月明かりに照らされた。「昨日来るものだと思っていたぞ」と彼が言った。「お前たちが約束を守るのが疑問に思っていたところだ」

父親が手押し車から手を放し、背筋を伸ばすと背骨が鳴った。「ここまで来るのが大変だったんだ」

「さぞ苦労したことだろう」と、男が言った。「だがこの先、困難は増すばかりだ」

「私たちを諦めさせようとしているの？」と母親が言った。

「まさか」と男が言った。「今考えを改めれば…後に残るのは不愉快な結果だけだ」

「誰にとって？」父親は水ぶくれができる手を握りしめた。

「もちろん、お前たちにとってだ」男が近づいてくると、外套の内側で、腰に下げたダガーの柄頭が光った。「それに、私にとっても同様だ。この契約を仲介したのは私だし、契約が結ばれた以上、相手方を失望させる訳にもいかない。だが、實際にはどちらも些細なことだ。お互いに分かっていることだ。お前たちはもう、引き返せないところまで踏み込んでしまった」

母親が仲介屋の前に踏み出て、頭巾の中を見上げた。「だったら、喋ってないでやるべきことをやりましょう」

仲介屋が頷いた。「その手押し車に載せているのは…」

父親は娘の遺体を隠すために使っていた黄麻布をめくった。山脈の凍つく風によって腐敗は抑えられていた。娘は埋葬布に包まれ、月の下で、青白い肌は真珠の輝きを放っているように見えた。娘の美しい茶色い髪が額と頬にかかるており、父親はかがんでそれを優しく、ベッドで寝ているだけであるかのように耳にかけてやった。母親は娘を見ようともしなかった。

「かわいらしい娘だな」と仲介屋は言った。「歳は？」

「6歳よ」と母親が言った。

「改めて、お悔やみを—」

「お前の同情などいらない」と父親は言った。「お前は、相手に契約を守らせてくればいい」

仲介屋が頷いた。「もっともだ。先方が中で待っている」

父親

少し昔のこと、廃墟になる前のこの場所は一部の村人たちが足しげく通う巨大な礼拝堂だった。厚い壁は祈りと願いを捧げる者たちを守り、長い夜でもステンドグラスの窓を見ればかすかな希望の光を見いだせたが、それも一時のことだった。定命の者が造るもの例に漏れず、希望はついえた。「大いなる確執」のあと、あらゆる信仰は力を失い、この礼拝堂もほかと同じように放棄され、冒涜されるがままとなっていた。

仲介屋が先頭に立ち、瓦礫の間を縫って進んだ。壊れた柱の影を通り抜け、バラバラにされた木製の信徒席の残骸を乗り越えて進む中、足元でガラスの破片が音を立てた。床にモザイクで描かれた聖者の顔の残骸をちらりと見た父親は、すぐに目を背けた。

「ここで…やらなければいけないのか？」と彼は尋ねた。

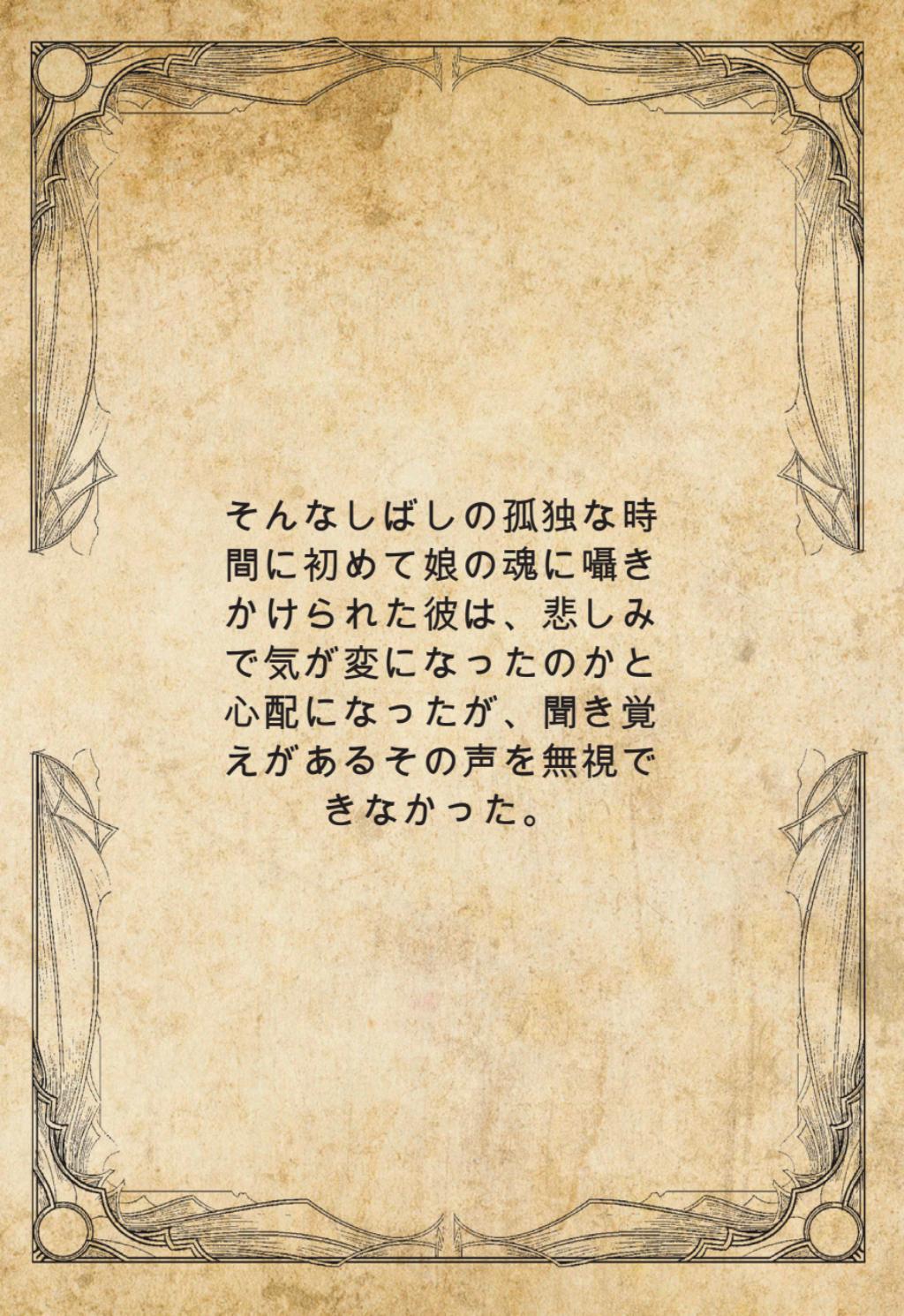
仲介屋が薄ら笑いを浮かべた「信心深いだとは知らなかったよ」

「そうじゃない」と父親は言った。「だが、理由もなく冒涜したいとは思わない」

「何も恐れる必要はない」と仲介屋が言った。「最早世俗にまみれた場所だ。かつては聖性や何らかの力があったとしても、当の昔に失われている。ここはお前たちの目的を果たすためにうってつけだ」

それを聞いても父親は安心できなかったが、口を開こうとする前に、娘の囁き声が頭の中で聞こえた。彼は娘の遺体を両手で抱えて運んでおり、娘の頭が彼の肩に寄りかかっていた。「お父さん、こわがらないで」と、唇を閉じたまま彼女が言った。「ここじゃなきやだめなの」

命を落とした夜からずっと、娘がこうやって彼に話しかけてきていた。あの夜、妻の薬が効かず、幼い娘はあえぎ苦しみながら最後の息を引きった。彼は蠟燭が消え、妻が他の子供たちを寝かしつけたあと娘の遺体の側に留まっていた。そんなしばしの孤独な時間に初めて娘の魂に囁きかけられた彼は、悲しみで気が変になったのかと心配になったが、聞き覚えがあるその声を無視できなかった。死してなお話しかけてきた娘は、自分を生者の世界に戻す方法を伝えてきた。大きな負い目を感じていた彼は生き返らせることを娘に約束したが、ほかの者たちの前では娘の声に反応しないようにする程度の分別はあった。妻ですら、気が触れたと思うだろう。



そんなしばしの孤独な時
間に初めて娘の魂に囁き
かけられた彼は、悲しみ
で気が変になったのかと
心配になったが、聞き覺
えがあるその声を無視で
きなかった。

礼拝堂の奥の隅で、仲介屋がかがんで床の格子を持ち上げた。錆びつい蝶番の軋む音が夜に響き、父親は驚いて身を竦ませた。格子の下には、狭い階段が地下に向かって続いており、一番下の段はぼんやりとした赤みを帯びた光に照らされていた。階段を降りるよう仲介屋が身振りで伝えてきたが、母親は尻込みした。

「あんたと一緒に下に降りると思ってるなら大間違いよ」と彼女が言った。

仲介屋がため息をついた。「こんな場所でも、ひらけていてはだめなんだ。それに悪気はないが、物取りが目的ならお前たちをここに呼び出すまでもない」

「お父さん、はいって」と娘が囁いた。「おりるの」

夫は妻を見た。「なあ、ここまで来たんだ」

「馬鹿な真似にも限度ってものがあるでしょうに」母親が顔をしかめて首を振った。「でも、仕方ないか…」

父親は先に降り、母親が続いた。ある程度階段を降りたところで、背後から格子が閉じる軋んだ音に続き、頑丈な錠に鍵がかかる音が聞こえた。ふたりが抗議の声をあげる前に仲介屋が言った。「我々の安全のためだ。出入口をそのままにしていたら、このあたりに棲む恐ろしい連中が入って来かねない」

重い足取りで階段を降り続けた父親と母親は、やがて礼拝堂の地下墓所に辿り着いた。墓所は燃えている松明の煙でもやがかっており、もやの下の湿った空気はかび臭かった。積み上げられた棺桶の外にある、死者への供物や思い出の品はすべて腐っていた。いくつかの豪華な石棺は墓荒らしによってこじ開けられて荒らされ、散乱する骨だけが残されていた。側面にある小さな部屋の中で、若い女と年老いた男が待っていた。

仲介屋が、女はヴィジェレイクランの強力な魔術師だと紹介した。彼女の髪は深みのある紅色で、刺繡が施された上等なシルクとサテンのローブを着ていた。火明かりを受けた彼女の緑色の瞳は、今にも癪瘻を起こしそうな傲慢さをたたえていた。火が付いた小さな火鉢が置かれた祭壇の横に立っている老人は小柄で、髪は薄く白髪。目はくぼんでおり、飾り気のない濃い灰色の毛織りの服を着ていた。仲介屋が彼は司祭だと言った。

「どこの司祭だ？」と父親は聞いた。

「光の聖堂の者が気にしているなら、違うと言っておこう」と司祭が答

えた。やかんの底を匙で擦るような虚ろな声だった。

「そうだったら驚くわ」と母親が言った。「光の聖堂の連中にも助けを求めたけど、冒涜だと言われた」

「だったら、ラズマの使徒か?」と父親は尋ねた。「あの連中にも話をしたさ。そして子供みたいに叱られたよ。均衡への敬意が欠けてるってね」

司祭が首を振った。「私はネクロマンサーではなく——」

「だったら何者だい?」と母親が尋ねた。

そこで仲介屋が口を挟んだ。「彼にはお前たちを助ける意思がある。ほかに何を知る必要がある?」

母親が両手を腰に当てた。「そりやあ取引相手のことは知りたいわよ。私たちを助けることに同意した理由もね」

司祭は目に不穏なものを浮かべつつ微笑んだが、それ以上答えようとしなかった。

「私が質問に答えよう」と魔術師が言った。「私がここに来たのは、約束のものを受け取るためよ。持ってきた?」

「ああ」と父親は答えた。

魔術師が手を差し出した。「先に渡してもらうわ。そういう契約よ」

娘を両腕で抱え、魔術師が求めるものを出すのが難しい父親に対し、司祭が優しく声をかけた。「さあ、遺体をここに置きなさい。私が用意した円陣の中央に」

下を見た父親は、地下墓所の床に、白亜を使って複雑な模様の円が描かれていたことに気付いた。重なり合う幾何学的な格子模様のなかに、秘術の紋章やシンボルが描かれている。父親は円陣に足を踏み入れ、ブーツで線を消さないように気を付けながら娘を中央に横たえた。すると下にある石の冷たさを感じたかのように、娘の遺体が体を丸めた。父親は円陣を離れ、外套の中から、年代物らしきワンドを取り出した。ワンドは艶を持たない黒い金属で造られており、細い棒の周囲に蛇が巻きつく意匠になっていた。そして遠い昔に剥がされ売られたのかもしれないが、宝石こそ付いていないものの、床の円陣のものと似た繊細な模様が彫られていた。

「これが約束のものだ」と父親は言って、ワンドを魔術師に差し出した。

彼女はゆっくりと恭しい仕草でそれを受け取り、隅々まで仔細に調べつ

つ手の中で裏返した。司祭も身を寄せ、彼女の肩越しに遺物を見詰めた。

彼の目が見開かれた。「これは…ヴィズ・ジンのものか？」

「伝説のワンドよ」と魔術師が言った。「制作者はランスラー、ヴィジエレイの筆頭職人ね」彼女が父親を見上げた。「どうやって手に入れたの？」

父親は肩をすくめた。「我が家に代々伝わっていたものだ。家宝と言えるかもしれない。言い伝えでは洞窟で見つかったそうだ」

「どちらかと言えば墓だろう」と仲介屋が小声で言い、荒らされた棺桶をちらりと見たが、父親は先祖に対するささやかな侮辱を無視した。

司祭が顎を撫で、次に魔術師に言った。「そのワンドの扱いには気を付けてなさい。お前には御せないほどの力を持っているかもしれない」

魔術師が、その言葉に苛立ったように見えた。「私の力について何も分かっていないくせに」

「結局、ワンドは対価になるんだよな？」と父親は聞き、魔術師が頷くとため息をついた。

「もうすぐ」と床に横たわる娘が囁いた。「もうすぐいっしょになれるよ」

魔術師

「それで、私の対価はどうなっているのかね？」と司祭が聞いた。

魔術師は老人を睨みつつワンドをロープの内側にしまいつつ、自分を見下した言い方に怒りを滾らせていた。彼は、イシャリ・サンクタムの気難しい老魔術師たちを思い出させる存在だった。ご立派な盟約を盾に、際限のないルールによって真の力を持つ者たちを押さえつけようとする嫉妬深い臆病者たち。連中があそこまで臆病でなければ、悪魔がカルディウムを蹂躪したときにサンクタムが陥落することはなかっただろう。

死んだ少女の父親が司祭に小さな革袋を手渡した。司祭が手のひらで重さを測って言った。「中味を見るまでもなく、同意した価格には到底およばないね」

司祭が革袋を握りしめた。そして目つきを脅すような背筋が凍るものへと変えつつ、恥をかかされたばかりの仲介屋の方を向いた。魔術師は、父親が妻と自分をどれほど危険な状況に陥れたのか自覚しているのか疑問に思った。

「悪いのは俺だ」父親が、魔術師の見込み以上の愚かさか、あるいは勇気を見せて言った。「あんたに対価を払えないことを分かってここに来たんだ。新しく契約を結べないかと思って」

司祭が父親の方を向いて冷笑した。「どのような契約だね？」

父親は口ごもった。「その、考えがあるわけじゃないんだが、必ず借りは返す。俺は体が丈夫で、よく働く」

司祭がにたりと笑った。「私に仕えるという提案かね？」

父親が青ざめ、躊躇した。おそらくは老人の態度が言葉遣いに怖気づいたのであろう彼を、魔術師は責める気にはなれなかった。しかし、明らかに必死な彼は「そういうことになるだろう」と言った。

司祭が仲介屋の側を離れて父親に歩み寄った。父親は何とかその場に踏みとどまったくのもの、わずかに姿勢を変え、老人と目を合わせるのに苦労していた。しばしの時間が過ぎたが、魔術師は様子を見つつ待った。彼女は父親に同情していない訳ではなく、司祭に借りをつくるなど警告したい気持ちもあった。特に、彼に仕えるのは止めておいた方がいいが、彼女に関係あることではないので黙ったままでいた。

「いいだろう」と司祭がようやく口にした。「今回は助けてあげよう。

だが願いを聞く代わりに、私の望みを聞いてもらう」

「と言うと？」と母親が聞いた。

「対等な望みさ」と司祭が言った。「時が来れば分かる。それでいいかね？」

父親はためらっていたが、突然、ぎょっとしたように娘の遺体を見た。彼は妙な様子でしばらく遺体を見つめていたが、やがて「構わない」と答えた。

「素晴らしい」司祭の態度が一変し、先ほどまで見せていた優しさが戻った。彼が革袋を父親に差し戻すと、父親は少し困惑した様子で、それを受け取った。「証人となるがいい」と司祭が言った。「我々は新たな報酬に同意した。そして対価の問題は解決された」

「確かに見届けた」と仲介屋が言った。その声には明らかに安堵が含まれていた。

「さて」と司祭が両親に言った。「お前たちは好きなように寬いでいいなさい。我々は準備をするので邪魔をしないように」

娘の遺体を最後に一瞥し、母親と父親が仲介屋の案内で地下墓所の主室に戻る一方、司祭は儀式の手順が書かれた書巻を再び開いた。魔術師は過去にそのような呪文を唱えたことはなかったし、そのような魔術が載っている書物を読んだこともなかった。書物はとても古そうで、用紙は黄ばみ、かなり風化した何かの革で装丁されていた。彼女にはほとんど意味が分からぬその内容を、老人はよく理解しているようだった。彼が床に胡坐をかけて座り、分厚い書物を開いたまま膝の上に乗せ、魔術師は近くの壁に背を持たれかけた。

「あなたは本当に司祭なの？」と彼女は聞いた。

彼が羊皮紙から目を離さず言った。「そうだとも」

「光の聖堂の者ではなく、ネクロマンサーでもないなら…」彼女がほかに思いつく教会はひとつだけだった。「あなた…ザカラムね？」

彼は頷いた。「そのとおりだ」

「死に絶えたと思っていたわ」

「そうなりかけた。だが、眞の教会の教えを守る者が僅かに残っている」

老人に対する苛立ちが残っていた魔術師は、彼に嫌味を言いたくなつた。「あなたたちの教会は、悪魔のメフィストによって救いようがないほ

どの腐敗に塗れたと聞いたけど」

そこでようやく老人が書巻から顔を上げ、彼女は一瞬、関心を引けたことに満足を感じた。「そういうお前は何者だ？」と彼が聞いた。まるで彼女をからかっているかのように落ち着いた様子だった。「お前は本当に魔術師クラン、ヴィジエレイの一員なのか？」

彼女は姿勢を正した。「その通りよ」

「我々の世界に最初に悪魔を召喚したのは、お前たちらしいじゃないか」彼が微笑んだ。

彼の発言が馬鹿げていることを強調しようと、魔術師は無理に笑った。

「それは遠い昔の話よ」

「もちろん、その通りだ」と司祭が言った。「それならば、ほかの誰よりも祖先の罪で責められることの不快さをよく理解しているだろうに」

傲慢さが彼の正しさを認めることを拒み、彼女は地下墓所を見渡した。
「あなたの教会は、これを認めているの？」

「親の愛には大きなる光がある」と彼が言った。そして少し間をおいてから、こう付け加えた。「お前のローブには、修行を完了したことを示す印や紋様がないな」

それを聞いた魔術師は壁から離れて彼に近づいた。怒りが再燃したのは、彼がまさに真実を口にしたからだった。彼女は修行を完了する前に教団から追放されていたが、そのことは誰にも伝えていなかった。「連中から学べることがなくなったの」と彼女は言った。「だから離れた」

「もっともなことだ」と司祭が言った。「力を求める者に大胆さは不可欠だ。だが、蘇生の儀式には危険が伴う。怒らせる危険を冒してでも確認する必要がある。お前は、儀式に加わるに足る能力を持っているのか？」

魔術師は、老人の質問が正当かつ妥当で、正直に答えるべきだと分かっていた。「私には、十分すぎるほどの能力があるわ」と彼女は言った。

「我々の世界に最初に悪魔を召喚したのは、お前たちらしいじゃないか」
彼が微笑んだ。

彼の発言が馬鹿げていることを強調しようと、魔術師は無理に笑った。
「それは遠い昔の話よ」

母親

準備に取り掛かった司祭と魔術師が呪文を唱え、何かを燃やし、床や壁に紋章を書き記す間、母親は夫や仲介屋と一緒に座っていた。立ち込める煙が目に染み、地下墓所の冷気が彼女を芯まで震わせた。彼女は、早くすべてが終わって欲しいと願っていた。

「どれくらいかかるの？」と彼女は仲介屋に聞いた。質問というより苛立ちの表明だった。

「分からぬ」と彼が言った。彼はまだ頭巾を被ったままだったが、目に火明かりが映るのが見えた。「急かすべきではないだろうな」

「その通りだ」と夫が言った。「必要なだけ時間かけてもらって構わない」

彼の希望は、彼女の苦痛だった。彼は娘が自分たちのもとに帰ってくると信じており、彼女にはそれを否定する度胸も勇気もなかった。もっと早くに正直に言うべきだった。彼がここまでやると知っていたら、こんな呪われた場所に来る羽目にならないよう、もっと強く思い止まらせようとしていただろう。苦痛を和らげてあげられただろう。最初は彼なりの弔いなのだと受け入れる方が楽に思えたが、彼が目標に近づくほど真実を伝えるのが難しくなり、今や到底不可能に思えた。彼のためを思ってしたことだったというのに。

「もう、見届けるしかなさそうね」と彼女は呟いた。

少ししてから司祭が現れ「準備ができた」と言った。

老人に続いて母親と父親が小さな部屋の中に戻ると、床の円陣の四隅を区切るように、より小さな円が描かれていた。中央にある娘の遺体は、埋葬布が取り除かれて位置が変わり、仰向けで両手を広げた格好になっていた。彼女の華奢な両手はそれぞれが小さな円に、そして頭と両足はほかのふたつの円に向けられていた。彼女はとても小さく見えた。まるで青白い小枝を手足にした人形のように。母親は娘を正視できず、夫の方をちらりと見た。彼は娘の姿を見て口を押さえ、息を詰まらせていたが、やがて気を取り直し、部屋の誰も口にしていない言葉に同意するかのように頷いた。

「俺たちは何をすればいい？」と彼が聞いた。

魔術師が答えた。「位置について」

彼の希望は、彼女の苦痛
だった。彼は娘が自分た
ちのもとに帰ってくると
信じており、彼女にはそ
れを否定する度胸も勇気
もなかった。もっと早く
に正直に言うべきだっ
た。

彼女はすでに、娘の右手の位置にある円の中に立っていた。司祭が、父親には遺体の足の位置にある円の中に立つように、仲介屋には左手の位置にある円の中に立つように指示を出した。母親は娘の頭の近くにある小さな輪の中に立ったが、下を向かず、生氣を失った我が子の顔を見ないようにしていた。

曲がったナイフと小さな鉢を手にして司祭が父親の前に立った。「この儀式には、ふたりの血が少しばかり必要なのだ」と彼が言った。「腕を出しなさい」

彼女が瀉血の話を聞いたのはその時が初めてだったが、夫がためらうことなく血を提供したとあっては拒むわけにはいかなかった司祭が娘の腕をまたいで彼女の方にやってきたとき、彼女は嫌々ながら腕を彼の方に伸ばした。彼が手のひらの肉を切ると、傷はそれほど深くなかったが、血が数滴、鉢に滴り落ちた。次に彼は鉢とナイフを床に置き、冷たい骨ばった指を使って母親の傷を布で包んだ。

「痛みはすぐに収まる」と彼が言った。「お前の悲しみと違い、長くは続かない」

彼はナイフには触れず、床に置いた血が入った鉢だけを持ち上げ、火鉢が燃える祭壇に向かって大股で歩いていった。そして死んだ娘の埋葬布を拾い上げ、それを裂いて二切れの布片にし、次に一枚の黒い羽根を集めた血に浸した。

「次は」と彼が言いながら父親を観た。「娘さんの記憶を提供してもらう。生前の彼女に対する愛を正直に語りなさい」

「愛だって？」父親が遺体を見ると、目に浮かべた涙が光った。「何を言えばいい？この子は末っ子で、唯一の娘で、この呪われた世界における喜びだった。娘は、病んでも決して笑顔を絶やさなかった。娘はよく…自分で考えたおかしな歌を歌っていて、働いてヘトヘトになった心を明るくしてくれたんだ」床の上の光景を見た彼は、言葉を詰まらせた。「俺はまだ—」

「まだ、なに？」と母親は聞いた。

父親はかぶりを振り、目をかたく閉じて言った。「何でもない。司祭様、正直に語れとおっしゃいましたね？ 本当は俺のせいなんだ。俺は娘を守れなかった」遺体から顔を上げた彼が、円陣の反対側にいる妻を見た。彼の表情は風化した墓石のように冷たく空虚で、彼女は夫が何を知っている

るのが疑問に思った。

「もう結構」と司祭が言い、血に浸した羽根で埋葬布に何かを書いた。書き終えると、彼は布片を横に置き、二つ目の布片を取り上げて待った。

少女の母親は自分の番だと感じた。彼女はどうせ失敗する儀式だと思っていたが、嘘をつくことはできなかった。ようやく口を開いた彼女の言葉は、夫に向けたものだった。

「私は…もちろん、娘を愛していたわ。でも、息子たちほどではなかった。私は娘を好きになれなかっただし、それは娘も同じだった。娘に乳をあげているときも他人のように、取り替え子のように感じた。母親がこんなことを言うべきじゃないのは分かっているわ」足元の丸みのある顔を見た彼女は、娘を亡くしてなお愛情が芽生えないことに恥と恐怖を感じた。「司祭様、記憶が欲しいんでしょう？私は、娘が夫にもたらしてくれた喜びを覚えてる。少なくとも、その点については娘に愛を感じなくもなかったわ」

初めてはっきりと本音を語った彼女は、誰もが言葉をなくし、立ち尽くしている部屋を上目遣いで見た。司祭が書くのを止めていた。魔術師と仲介屋が彼女を見つめたが、夫は顔をそむけた。彼女は自分の言葉が夫の心を深く傷つけたことを悟った。残る真実を口にすれば、夫の心を壊してしまうだろう。

「司祭様、もういいでしょうか？」と彼女は聞いた。

「これで」彼が咳払いをして言った。「十分だ」

二つの目の埋葬布の布片に書き終えると、彼は聞いたことのない言語で何事かを唱え、両方の布片を一緒に火鉢の上に置いた。それらが燃えると、刺激臭のある煙で部屋が満たされた。

「なぜ」魔術師が口を開き、咳き込んでから続けた。「なぜ記憶を破壊するの？」

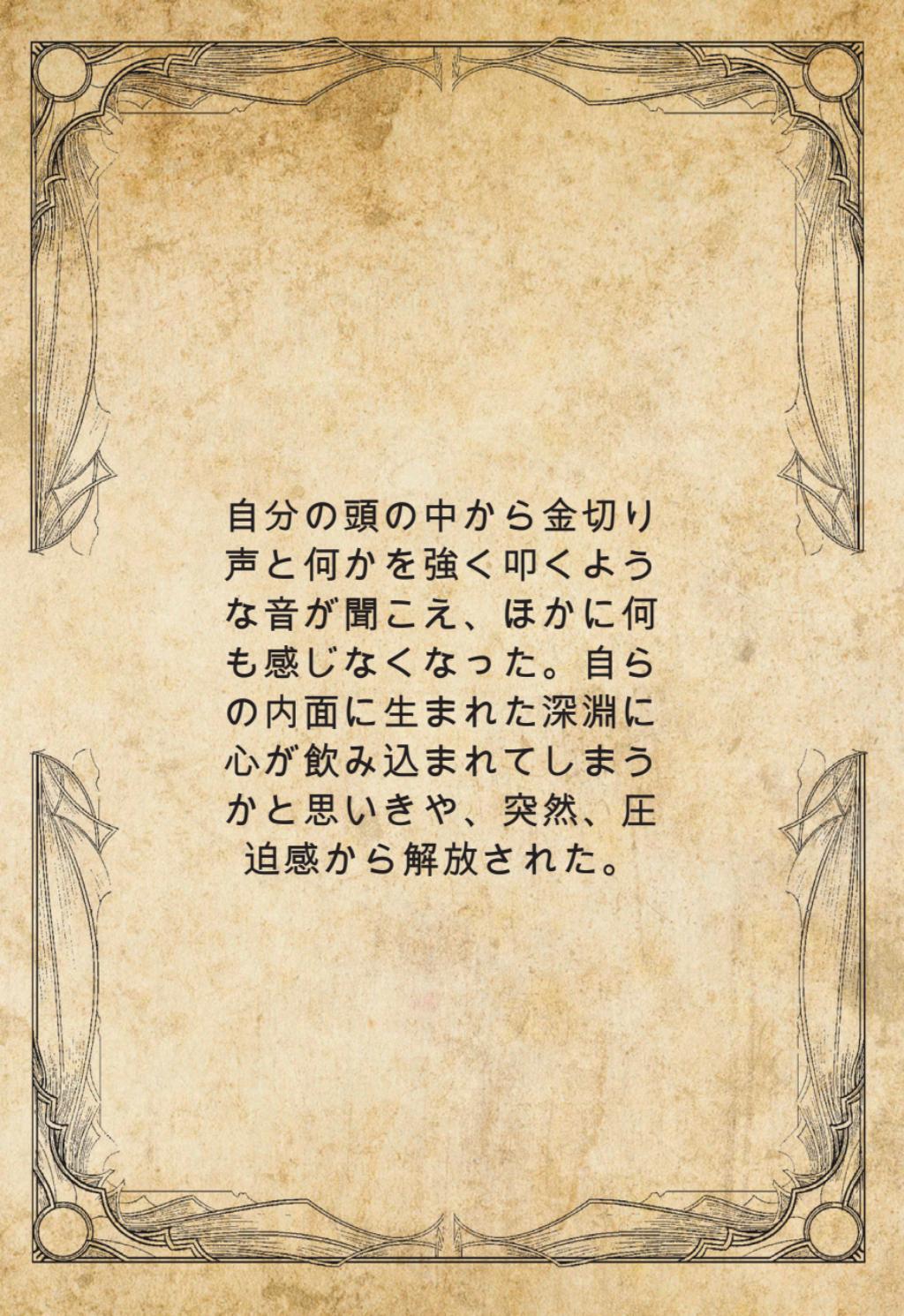
「どういう意味だ？」と司祭が聞いた。

魔術師は顔をしかめ、混乱しているようだった。「これらの記憶は親子を結びつけるものでしょう？それをなぜ燃やすの？」

司祭が明らかな侮蔑を込めて彼女を見た。「私が間違いを犯したと思うのなら、書物を確認しなさい。訂正是喜んで受け入れよう」彼が、自分の横の祭壇に置かれた分厚い書巻を手で示した。

魔術師が異議を取り下げた。「いえ。あなたは間違ってない」

司祭が頷き、両手を上げて魔術師と声を揃えて詠唱した。ふたりの最後の呪文が地下墓所を満たすと、母親は残響と一緒に囁き声が聞こえたような気がした。火明かりが弱まったのか、あるいは彼女の視界が暗くなったのかもしれない。何かに吸い出されているかのように墓所の空気が薄くなった気がして、呼吸が苦しくなった。自分の頭の中から金切り声と何かを強く叩くような音が聞こえ、ほかに何も感じなくなった。自らの内面に生まれた深淵に心が飲み込まれてしまうかと思いつきや、突然、圧迫感から解放された。彼女は必死に息を吸いながら、目を見開いた。



自分の頭の中から金切り
声と何かを強く叩くよう
な音が聞こえ、ほかに何
も感じなくなつた。自ら
の内面に生まれた深淵に
心が飲み込まれてしまつ
かと思ひきや、突然、圧
迫感から解放された。

司祭

儀式は、その本来の目的を達成し、もはや止めることはできなかった。地下墓所にいたほかの者たちは初めはそれに気付かず、気付くことなく死ぬかもしれないが、それで何が変わるわけでもない。司祭は、正しく主の役に立ったのだ。

床に横たわった小さな体が痙攣すると、母親が恐怖の金切り声を、父親は歓喜の叫び声をあげた。父親が息を吹き返し震えている娘の隣の床に倒れ込み、彼女を抱きしめてむせび泣いた。「息をしてる！」と彼が言った。「生きてるぞ！」

「そんな」母親は目を見開き、口を開けっぱなしにして立ち尽くしていた。「あり得ない」

夫には彼女の声が聞こえていないようだった。または、もっと大きな心に届く声に耳を傾けていたのかもしれない。「言うとおりだ」と彼は囁いていた。「お前の言うとおりだった」

崩れ落ちて膝をつき、背を丸めて肩を落としている母親のすぐ前、石造りの床に司祭のナイフが置かれていた。「このバカ」と彼女が囁いた。「あんたのせいで私たちはお終いよ」

父親が顔を上げた。涙で汚れが滲んだ顔に困惑を浮かべ、彼は妻に目をしばたかせた。「俺たちがお終いだって？魔術は成功したんだぞ！この子が生き返った！」

「そのせいで私たちは死ぬの！」そう叫び返した彼女の取り乱し方は、段々と酷くなっていた。

魔術師が彼女に詰め寄った。「どういうこと？」

母親の顔は、無力感を伴う恐怖で真っ青になっていた。「娘はずっと病気がちだった。だから…だから正しいことだと思ったの。正しいことではないにしても、最善だと思ったのよ」彼女は腹を掴み、体を揺らし始めた。「私たちのためにしたことなの」すすり泣きながら言った。「私たちのためにしたことなんだから！」

「何をしたんだ？」と夫が聞いた。

少女の母親が、司祭はすでに気付いていたことを告白した。「2週間前に」と彼女が言った。「独りで薪を集めに出かける夢を見て、森の中で狼に…恐ろしい獣に捕まったの。あんなの見たことがなくて、ばらばらに引

き裂かれると思った。けど、あれは普通の狼じゃなかった。頭の骨の中で目が燃えていて、話しかけてきたわ。誓って本当のことよ。あの狼は、私に話しかけてきたの！」

「何を言われた？」魔術師が問い合わせた。

母親が思い出して震えた。「夫と子供たちを…私が愛する者たちを全員狩って、ゆっくりと喰ってやるって。言うことを聞かなければ、夫と子供は生きながら骨髄を啜られることになるって言われた」

「一体何をしたんだ？」と夫が繰り返した。

母親が続けた。「狼は、ほかの者には手を出さないと約束した。もし…」

「もし、なんだ？」と父親が声を荒げ、母親は怯んだ。

「末の子を差し出せと言われたの！」と彼女が言った。「その子は…どちらにせよ長生きできなかった。そうでしょう？私はもう、世話をするのにうんざりしてたのよ。私たちにとってただの重荷だった！」

これを聞いて、魔術師が司祭を見た。そして、小さな部屋の中を横切って祭壇に近づき、古の書巻を掴んで開いた。司祭は彼女を止めようとした。もし、彼女にその書を読む知識と技術があれば、彼女は決して儀式を始めさせなかっただろう。だが今さら真実を突き止めたとしても、力不足の彼女ではどうすることもできない。

「お前は…娘に毒を盛ったのか。夢なんかのために？」頭からその考えを追い出そうとするかのように、父親が首を振った。「自分の命惜しさに娘の命を差し出したのか？」

「違う！」と彼女が叫んだ。「あなたのため！息子たちのためよ！」彼女が両手で額を掴んだ。「でも、私たちは取引を台無しにしてしまった。あの狼がやってくるわ！私たちを喰らうために！」床のナイフを見た彼女は、恐怖に突き動かされるままにそれを拾い上げて娘に突き刺し、再び生贊にしようとした。

父親もとっさに反応し、娘を手放して母親を止めようとした。ふたりは衝突し、もみ合いながら倒れ、互いを掴み、ひっかき、言葉をぶつけ、叫んだ。そして、母親が一度だけ大きな悲鳴を上げた。父親が転がって母親から離れるとナイフが見えた。それは母親の胸に、心臓と喉の間に突き立てられていた。母親の目は見開かれ、喉から血が泡立つ音と喘鳴が聞こえる一方で顎が痙攣していた。夫は声をあげて妻に駆け寄り、指先で優しく彼女の頬に触れ、喉に触れ、ナイフの柄に触れた。そして腕の中で息を引

「これは蘇生術じゃない」と彼女が懼きながら呟き、書巻から顔を上げた。

き取るまで何も言わず、何もしなかった。

わずかな時間で一連の出来事が起きる間、司祭は身動きひとつしなかった。彼は仲介屋が後ずさり、同じく成り行きを見守っていたことに気付いた。魔術師は、夫婦を止めたいという気持ちはあったが、明らかになり始めた真実に気を奪われていた。

「これは蘇生術じゃない」と彼女が慄きながら呟き、書巻から顔を上げた。

「そうなのかね？」と司祭は聞いた。「なら教えてくれ、師から学ぶことはもう何もないと宣うヴィジエレイの者よ。これは何の術だったのだ？」

「父さん？」と少女の体が言い、瞬きを繰り返しながらようやく目を開けた。

「ここだよ！」父親は死んだ妻から離れ、娘の側に駆け寄った。彼の体は母親の血に塗れていた。「お前の父さんはここだとも」

魔術師がローブの下から古代のワンドを取り出した。「それはお前の娘ではないわ」と彼女が言った。「それから離れない。今すぐに」

「何を言ってる？」娘の額を撫で、髪を後ろに撫でついている父親は、聞く耳を持たなかった。「見ろ。娘じゃないなら何だって言うんだ？」

「分からぬ」と言った魔術師が祭壇と司祭から距離を取りつつ、少女の体にワンドの狙いを定めた。「私は呪文のほんの一部しか読めない。けど、間違いない。これは蘇生術じゃなかった。召喚術よ」

「お前は分かっていない」と父親が言った。「この子はずっと俺に話しかけてた。何もかも、この子が導いてくれた。ここに来れば生き返れると教えてくれたんだ」

「あなたは騙されたの」と魔術師が言った。彼女の声は震えていた。「私たち全員が騙された。けど、まだ間に合う。私なら、完全に憑依される前にその体を破壊できる。それから離れなさい。さもなくば、あなたごと破壊することになるわ」

「本当に、お前に破壊できると？」と司祭は聞いた。

身構え、ワンドを握り直す魔術師が、自らへの疑念を抱いたのを司祭は感じ取った。彼女自身も目をそらし続けていた、力不足への懸念だ。

「本当にそれだけの技術を持っていると思うのかね？」と彼は軽蔑の言葉で挑発した。「素晴らしい力を秘めているのかもしれないが、所詮は

鍛錬の足らない子供だ。お前には忍耐力がない。自らの無知を認める勇気がない。そんなことだから、先祖の大いなる罪を繰り返すことになったのだ」

「違う」と魔術師は囁いた。追い詰められた彼女が、離れた場所で影の中に立っている仲介屋の方を向いた。「一緒に食い止めるわよ！」

「一緒に？」と彼が聞いた。「俺の仕事はもう終わっている」

魔術師は彼に毒づき、古代のワンドで娘の体を狙って呪文を唱えた。司祭は魔術師がファイアボルトを放つつもりだと考えたが、噴き出した炎は逆流し、ロープごと彼女を火だるまにした。魔術師は悲鳴をあげて倒れ、おそらくは猛火を消そうと悶えながら床を転がった。肉の焼けた臭いがする煙が立ち込めた。彼女はよろめきながらもなんとか立ち上がり、動物のように甲高い悲鳴をあげながら部屋から逃げ出した。

仲介屋がダガーを取り出し、何も言わずに彼女のあとを追う中、司祭は彼女が古代のワンドを落とした場所に大股で歩み寄った。触れないほど熱くなっている可能性が頭をよぎったが、いざワンドを拾ってみれば、金属は炎症に悩まされている指の関節が即座にうずくほどに冷たかった。死んだ妻の横で床に座り込んで娘の体を抱えている父親は、ほかのことは目に入っていない様子だった。

少ししてから魔術師の悲鳴が止んだ。

そして仲介屋が重い足取りで部屋に戻りつつ、かぶりを振った。「今の騒ぎで、余計な連中の注意を引いたかもしれない」彼のダガーは血と煤に塗れており、ワンドが司祭の手にあることに気付いた彼はそのダガーでそれを指した。「それを渡してもらおう」

仲介屋

司祭が嘲笑した。「この秘宝は、お前などより遙かに優秀な者にこそ相応しい。これを手に入れてどうするつもりだね？ 売るのか？」

仲介屋は声に不穏な雰囲気を滲ませた。「売ろうが暖炉の上に飾ろうが、あるいは便器の汚れを落とすために使おうが、それは俺の勝手だ。お前との契約は果たされた。そのワンドはお前の報酬には含まれていない」

「これは交渉ではない」と言った司祭が、しゃがれ声で吸血の呪いを叫んだ。

仲介屋は愚か者ではなかった。地下墓所に入る前に用意した首に下げているアミュレットは、おそらくワンドの売値と同じくらいの大枚をはたいて手に入れたもので、司祭の闇の魔術からしっかりと彼を護ってくれた。

「実に面倒だ」と老人がため息をついて言った。「私は粗っぽいやり方は嫌いなんだ」

仲介屋はアミュレットで防げない呪文の可能性を考え、別の呪文を唱えられる前に切り伏せようと司祭に駆け寄った。だが、司祭は仲介屋が思った以上に機敏だった。彼はダガーを避け、部屋の反対側へと跳躍した。彼らに挟まれた形になった父親は、床の上である程度の正気を取り戻しており、まだ我が子だと信じている娘の体を身を挺して守ろうとした。

司祭が父親に向かって叫んだ。「おい、お前！ 今すぐその男を殺し、私への借りを返せ！」

父親がそれに従ったとしても、仲介屋にとって農民は大した脅威にはならないだろう。妻の体に突き刺さったナイフを除いて武器はなく、悲しみでまともに考えることすら怪しい男だ。だが司祭にとって驚いたことに、父親は何もしなかった。彼は意思を感じられない愚か者の眼差しで、老人を見上げるだけだった。

「立て！」と司祭が叫んだ。「奴を殺せ！」

仲介屋はこの混乱に乗じて部屋を横断する跳躍をみせ、老人にダガーを突き刺した。驚いた司祭が呻き声をあげ、肋骨に刺さったダガーを見下ろした。金属のワンドが落ち、敷石にぶつかって音を立てた。司祭は両手で短剣の十字鎧を力なく掴んだが、それをどうすればいいのか分からなかった。彼は仲介屋の顔を見上げ、疑いの目で白眉を吊り上げた。

「なんだ？」と仲介屋は聞いた。「お前の主人は、ここを生きて出られ

「実際に面倒だ」と老人が
ため息をついて言った。
「私は粗っぽいやり方は
嫌いなんだ」

ると約束したのか？」

司祭が何か言おうとしたが込み上げてきた血にむせ、口から滴った血が彼自身にかかった。仲介屋は後ずさり、ダガーを引き抜いた。司祭が床に崩れ落ちた。

「よくやった」と少女の体が言った。

父親は彼女を見下ろして微笑んだ。「俺は何もしないよ。これは—」

「お前ではない」と彼女が言って、仲介屋を見上げた。

父親は座ったまま背筋を伸ばし、頭を傾げ、困惑してまま微笑んだ。いっそ哀れなほど、彼は現実を受け入れることを拒んでいた。

「お前の娘じゃないのさ」と仲介屋は告げた。

「奴は…欺瞞の帝王…」瀕死の司祭が擦れた声で言った。「ペリアルだ」

仲介屋は笑った。「じゃあ、お前は承知の上だったわけか」

「もちろん…知っていた」司祭は咳き込み、敷石に血を吐いた。「私は送り込まれた身だ」

ペリアルは少女の死体を立たせ、その口を通して司祭に話しかけた。「お前もよく仕えてくれた」

司祭は苦痛に呻き、顔をしかめながら体を捩じって悪魔の方を向いた。

「私は…お前の…従者ではない」

ペリアルが笑った。「嘘をつく者はすべて私の従者だ」小さく、柔らかな足でばたばたと音を立てながら悪魔は司祭のに近づき、彼の横にかがみこみ、囁いた。「お前が主人だと信じている者を、私が知らないと思っているとでも？」

一切の力は失った司祭が崩れ落ち、その頬が自身の血だまりに浸かった。彼はほとんど喋ることができなかつたが、最後の力を振り絞って囁いた。「お前こそ…奴の…従者だろうに」

「どうした？」死んだ少女の父親は床に膝をつき、その両手は力なく左右に垂れ下がっていた。「なぜお前がそんな邪悪な言葉を口にするんだい？」

ペリアルが笑った。死んだ少女の喉から出る低い笑い声が、地下墓所の壁を這うように響いた。「この期に及んで自らに嘘をつくか」足早に彼の方にやってきた欺瞞の帝王は、かがんで彼に顔を近づけ、まるで子供にするような仕草で大声を上げた。「お前の娘は死んだ。お前の妻が殺した

お前たち定命の者はいとも簡単に嘘をつく。恥のために嘘をつき、恐怖のために嘘をつく。自分の野心と強欲のために嘘をつく。だからこそ、お前たちはすべて我が子供なのだ」

のだ。だが、お前もそれを分かっていただろう？お前は娘を守れず、だからこそ我が声に従った。なぜ娘の死体を手押し車に載せてここに持つてることになったか、まさか自覚していないとでも？お前も、お前の妻も、魔術師も、司祭も、お前たちを集めた仲介屋すらも、お前が嘘をついたからここに来ることになったのだ。お前たち定命の者はいとも簡単に嘘をつく。恥のために嘘をつき、恐怖のために嘘をつく。自分の野心と強欲のために嘘をつく。だからこそ、お前たちはすべて我が子供なのだ」

「違う」と言った父親は、まるで首がすわっていない子供のようにかぶりを振り続けた。「お願いだ！いい子だからやめてくれ！」彼は悪魔に駆け寄り、絶望のなかで悪魔を引き寄せて抱擁し、死んだ少女の白いドレスに顔をうずめてすり泣いた。「ありえない！信じるものか！」

「お前が何を信じるかは関係ない」そして悪魔は両腕を男に巻き付けて引き絞り、肋骨を碎いた。父親は悲鳴を上げようとしたが、肺からあらゆる空気が絞り出され、地下墓所のアーチ型の天上を見ることしかできなかつた。口は開きっぱなしになり、目は血走った彼は、ようやく真実を受け入れた。

自らの体を伸ばして男の中に入り込み、その生きた肉体を乗っ取った悪魔は、床を叩き、爪を突き立てながら移動した。肉が裂ける音が部屋に響き渡る中、震える肉塊から角と棘のある手足が飛び出し、いくつものグロテスクな口とガラス玉のような目が現れ、最終的にベリアルの完全なる姿を形作つた。

仲介屋は跪いて頭を垂れた。「主よ、ご命令を」

ベリアルが声高に笑った。「這いつくばれば、殺されないと思っているのか？」

「何でも仰せのままにいたします」と仲介屋は言った。「サンクチュアリのすべてはあなたのものです」

「違う」とベリアルが言った。「メフィストがいまだこの地を徘徊し、奸計を巡らせている。だが、このベリアルが顕現した。サンクチュアリは我的ものではない。今はまだな」

仲介屋は恐怖の念に打たれつつ思い切って顔を上げ、眼前にそびえる恐怖を見た。「しかし…嘘をつく者すべてがあなた様の下僕です」

ベリアルの変化し続ける肉体が浮かび、祭壇に向かった。「嘘が足りぬ。サンクチュアリの子らが真実などというものの存在を信じることをや

めたときこそ、この世界が我がものとなる」ベリアルが振り返った。「だから、ひとまずはお前を生かしておいてやる。そのワンドを取れ。我が福音を広める旅に出よ」

仲介屋はもう一度頭を垂れた。「謹んで主命を遂行いたします」

著者紹介

Matthew J. Kirbyは高い評価と数々の賞を得ている作家で、『The Clockwork Three, Icefall』、『The Lost Kingdom』、『A Taste for Monsters』、『Star Splitter』など数多くの小説を世に送り出しています。彼は『Book of Lorath』や『Book of Prava』といった「ディアブロ」ユニバースの小説のほか、「アサシン クリード」ユニバースの作品も手掛けています。彼の作品は最優秀ジュブナイル・ミステリー部門のエドガー賞や児童文学部門の米国ペンクラブ賞など、数多くの賞を獲得しています。現在、彼は家族とともにアイダホ州に住んでいます。